

論説

グローバル化の中の言語 —その淘汰と進化—

東條 加寿子

2014年8月、3年に一度開催される世界応用言語学会 (AILA) が、オーストラリア・ブリスベンで開催された。学会には世界80か国から約1,600人の研究者が参加し、“One World – Many Languages”のテーマのもと、シンポジウムや研究発表等2,300の提案がなされた。本大会で印象的だったのは、グローバル化の中で応用言語学の理論やその研究手法が問い直され、新たな方向性が模索されていることであった。ここでは、シンポジウムや基調講演を手掛かりに、英語をはじめとする様々な言語がグローバル化の中でアイデンティティを主張しながらどのように変容し、その変容を応用言語学がどのように捉え直そうとしているかを考えてみたい。

Language and Trauma (Invited Symposium: Brigitta Busch, Univ. of Vienna 他)

このシンポジウムでは、史上に足跡を残すホロコーストや植民地化、アパルトヘイトや民族紛争を体験した人々の言語使用の実態を分析し、母語使用が権力に対する抵抗の証であったり、過酷な体験を語り継ぐためにいかに言語が重要な役割を果たしてきたかを浮き彫りにする研究手法が示された。トラウマ的体験を内包した個々の言語は、グローバル化進展の陰で、歴史を語り継ぐ重い使命を担っている。

Linguistic Landscape Research as a Means for Broadening Language Policy: Theory and Practice (Keynote: Elana Shohamy, Tel Aviv University, Israel)

言語景観 (linguistic landscape) とは、公共的空間にある標識などで使用されている言語状況を示すが、近年、多言語社会を分析する手段として注目されるようになった。この基調講演では、複数民族で形成されるテルアビブ市の言語景観を事例として、言語政策研究に一石を投ずる提言が行われた。多民族国家イスラエルでは、2002年の最高裁判決によって公共標識はヘブライ語、アラビア語および英語の3言語で表示することが義務付けられるようになった。これはアラビア語にも平等の市民権をとの言語政策を擁護している。しかし、同市の言語景観を採取して観察すると、ヘブライ語がアラビア語に対して圧倒的に優位で、そこに英語標識が台頭してきているという状況であるという。このように、言語景観は多言語社会の言語使用の実態を写し取るものであり、民族間で政治的力関係が作用する社会においては、多言語社会の言語政策という建前論が看過してきた言語間の不平等を浮き彫りにする。

Lookalike Language and the Nature of Sociolinguistic Globalization (Keynote: Jan Blommaert, Tilburg Univ., Netherlands)

ここでは、グローバル化がもたらしつつある言語の変容が新しい観点から分析された。例えば英語。グローバル化によって人やモノの流動化が加速化し、英語が世界中で使用されるようになった今、各地域で英語が変容し「記号化 (エンブレム) 化」してきているという。例えば日本における和製英語は、日本語母語話者に対しては英語の“趣”を伝え、漠然とした意味を伝達する機能を果たすものの、英語の言語構造から大きく逸脱しており、英語母語話者にとっては意味をなさない。英語に似て非なるもの、すなわち英語の lookalike language というわけである。グローバル化によって世界の隅々まで伝播された英語は、現地語との接触過程で言語的にその原型をとどめない地域限定の「記号」に変異する。この英語の土地言葉化 (vernacularization) は、地域言語のアイデンティティの主張・抵抗であり、グローバル化 (globalization) がもたらす非グローバル化 (deglobalization) である。

New Chinglish: Translanguaging Creativity and Criticality (Keynote: Li Wei, Univ. of London)

大会最後の基調講演は、中国語話者によって創造された英語 “Chinglish” についてである。講演の中で紹介された “Come look look” “friend price” “goveruption (政府汚職)” “3Q (サンキュー)” などの事例を見れば、Chinglish がいかにクリエイティブで、かつ、いかに英語から言語的に逸脱しているかがわかる。本提案で重要な点は、Chinglish のような現象をポスト多言語主義と位置付けていることである。Chinglish は、英語と中国語間 (between) の接触によりもたらされた言語現象ではなく、二言語の接触を超えて (beyond) 新たに創造された言語現象であると論じる。すなわち、新しい言語現象を世界言語 vs. 地域言語、あるいはグローバル化 vs. 地域化といった二極対立構図の中で論ずるのではなく、グローバル化や多言語主義の次のフェイズの中で論じようと試み、この現象を translanguaging と呼んでいる。

グローバル化の中で言語のあり方は確実に変わりつつある。国境が取り払われ、地域言語の境界が取り払われ、多言語を前提とした社会が生まれてきた。その中で最も広く使用されるようになった英語は *lingua franca* となったが、それによって、皮肉なことに、英語の母語話者と非母語話者の区別が不明瞭になってきている。そんな中で、言語は歴史的に主張し、政治的に主張しているという捉え方、Lookalike English はもはや英語ではないという捉え方、Chinglish は中国語母語話者の新言語活動だという捉え方が示されたのが今回の大会であった。

グローバル化の中で言語は生き残りをかけてアイデンティティを主張しているのではないか。グローバル化の中で言語は淘汰にさらされ進化しようとしている。

7 日本政府は、ワシントン条約への加入 (1980年11月4日) 以前の象牙と、2度にわたる合法的な輸入象牙を登録する制度を設けている。絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律20条。

8 ケニアは、野生動物保護区を管轄するケニア野生動物公社 (KWS) の武装レンジャーによる保護政策の強化によって、観光産業の発展と先進国の援助を期待した。住民は保護区外へ追いやり、国家との対立を生じた。リチャード・リーキー／バージニア・モレル『アフリカゾウを護る闘い—ケニア野生動物公社総裁日記』コモンズ、2005年。

9 国際捕鯨取締条約の国際捕鯨委員会 (IWC) は、1982年商業捕鯨の禁止を決定し (附表10(c))、またワシントン条約COP7 (1989年) は、アフリカ象全個体群の附属書I掲載を決定した。

10 西崎、前掲書、31頁。